

サホビコ譚と雄略紀十四年四月の条

——日下部氏を通して——

森 昌 文

序

本誌八十五集では、安康記・目弱王の乱をとり上げ、当譚にみる安康の行為は書紀・靈異記に記載された雄略の固有伝承が反映されたものであることを論じた。史実では数多の皇位継承者を殺戮しながら即位したのであるが雄略を、皇統の神聖性の故に、否定された雄略伝承を安康に負荷させることによって雄略を「正」の論理に封じ込めたのが目弱王譚の本質であった。また当譚を形成するに際しては、雄略を基軸とする日下部氏の関与、吉備氏一族の反乱伝承などが不可分に投影されていることを指摘したのであるが、小論では更に垂仁記・サホビコ譚へと論をすすめ、古事記内にみる雄略伝承の位相を確認するのがねらいである。

一

目弱王、サホビコ両譚の類似性についてはすでに先学諸氏によって指摘されているところである。まずは主な類似点を挙げつつ

問題となる幾つかの所在についてその概略を付しておく。すなわち、(一)歌謡を伴わず会話によって進展する反乱物語は両譚のみである、(二)ホムチワケ、目弱王と共に子供が登場する、(三)垂仁、安康両天皇共に午睡をしているところから事件が始まる、(四)サホビコは開化天皇の子、垂仁は同天皇の孫であり、一方大日下王は仁徳の子、安康は同天皇の孫にあたる。またサホビメがサホビコの妻であるならば大日下王の妻である長田大郎女と対応関係にあることなどである。

このうち(四)については、サホビコとサホビメの関係を兄妹による古層の政教未分体制と捉えるか、あるいは同母兄妹婚による近親相姦説とみるかについては今までに多くの論が立てられてきた⁽¹⁾。いわばサホビコ物語を解釈するにあたっての中枢部となるだけに慎重を要さなければならないところなのだが、古事記中巻が王権の版図拡大、ならびに政治支配体制の進展強化の由来を説くことにモチーフがあることから、オナリ神信仰などと同様に三輪王朝を中心とした我國の古層支配体制にも兄妹分掌によるヒメ・

ヒコ制の歴史的存在を想定し、そしてその崩壊を物語化したものがサホビコ・ビメ譚であると考えるべきであろう。とくに垂仁記に語られているという歴史意識上の視座を離れての論は空疎なものになることを免れ得ないと思われる。また(白)の天皇の午睡に關連して述べるならば垂仁、安康の傍らに后となったサホビメ、長田大郎女がそれぞれに供奉されているという愛の要素が反乱物語にオーバーラップしてゆく構成についても類をみない類似として着目してよい。サホビメについては論ずるまでもなく、長田大郎女についても「汝思す所有りや」と問う天皇に対し「天皇の教き澤を被りて、何か思ふ所有らむ」と答える后にはもはや先夫、大日下王が虐殺された遺恨など全くもって介在しない仕立てになっている。古事記にみる反乱物語の中でこうした謀叛に愛を絡めた話は物語の成立としては比較的新しい段階のものであると一般には考えられ、殊にサホビコ譚にあっては先行論文が認めているとおり、かなり新しい時期の所産であって安万侶の朱筆が加っているとの指摘もある。この反逆と愛との整合背景には在地豪族が支配権拡充の為に天皇家の傘下に吸収されてゆく過程をよみとることができるのだがこの点については後述する。

ところで(二)に關連していえば、古事記中・下巻の物語は歌謡物語と称されるほどに物語の中で果している歌謡の役割は多大であるが、サホビコ、目弱王両譚は歌謡の採用なしに会話による事件進展をはかっており、登場人物の相互呼吸が緊迫して臨場感豊かなものとなっている。説教に用いられた教本ともいわれている『日本書紀』には実に多くの会話がみられるが、会話体は聞き

手を意識した語りの聞かせどころを劇的に展開する表現形式であったらしく、いわば両譚は「歌のわかれ」を告げる物語であった。(白)のホムチワケ、目弱王とそれぞれ子供が登場する問題については、前者は火中出産による神聖児生誕を告げるもので「上宮記一云」の系譜的記述から河内王朝の始祖的存在であるホムタワケ(応神)は本来ホムチワケであり、ホムタワケは息長帯比売伝承の採用と共に母子一体となって記、紀にとり入れられたとの見解にみるように、天皇殺害を犯し誅伐されてゆく目弱王とは同じ子供であっても物語の中で扱われる位置は大きく相違する。火中によるホムチワケ生誕はホデリ・ホスセリ・ホフリ生誕との関連もあるわけで別箇の問題をはらんでいるので当類似点についてはさしあたり今は除外する。

両譚にみる如上の類似性は従前の研究成果ではただ類似のみの指摘にとどまるのが現状であった。小論の目的は垂仁、サホビメの会話にみるサホビコ謀叛の導入譚と目弱王譚に於ける安康、長田大郎女「神牀」場面とに焦点を絞り、その類似性の中から物語形成の基盤と発展を問うところにあるのだが、その類似性に脈絡をつけ橋渡しをしたのが目下郡氏である。以下、この点についての考察に移る。

二

開化記の系譜ではサホビコ・ビメの祖母は春日の建國勝戸實とあり、春日も沙本も大和国添上郡の地名であることからサホビコ物語は春日、つまりワニ氏の伝承が反映されていると考えるのは

一見正鵠を射ているようだがそうではあるまい。「サホ」にまつわる物語にワニ氏介入の痕跡は殆んど認められない。同じ開化記の系譜の割注では「沙本毘古王は日下部連、甲斐国造の祖」と記されていて『姓氏録』、河内国皇別の日下部連の条に「彦坐命子狹穂彦命之後也」、「三代実録」貞観六年八月八日壬戌条に「播磨国飭磨郡人陰陽大属正六位上日下部利貞。父武敏位正六位日下部藏直等賜姓日下部連」。賈附撰津国嶋上郡「狹穂彦命之後也」とあって日下部氏の遠祖はサホビコであるとする意識が極めて強い。従って、先にみた両譚の類似点から推しても大日下王（目弱王の父）の名代部として日下部が制定されたことから、サホビコ譚への氏族介入はワニ氏と抱えるより日下部氏と考えた方が至当である。勿論、サホビコ譚の形成は一朝にして成立したわけではなく幾多の伝承段階を経由していることは言うまでもないことで、サホビコ謀叛とホムチワケ出生の間には形成過程にひとつの溝がある。前者、兄・夫との間で佇立するサホビメの「哀しき情」という描写の新奇さと、後者の火中出産以降にみる神話的展開には明らかに物語性質上の隔絶がみられ、そしてその隔絶が示すように同譚の核心部はヒメ・ヒコ制の終焉と出雲大神の祟りを招来する神聖児ホムチワケ出生を述べるところにあると言える。

サホビコ沙本（書紀では「狹穂」）という地名は、地理上の事実にこだわるべきでなく、「稲城」に於けるホムチワケ出生との関連から「穂」と「火」とが喚起されて命名された説話的地名と抱えるべきであらう。いわば前支配体制の崩壊と貴子生誕との結合をサホ氏という一豪族に仮託するところにこの物語の構想背景の

一端が伺われ、物語展開上付加された「サホ」にまつわる謀叛譚がドラマ仕立ての要請によるものであらうことを物語っている。

つまりサホビコ謀叛譚は後続するホムチワケ出生以降の物語展開にかんがみながら構想された痕跡があることを示しているのである。この指摘は他の箇所からも推考できる。垂仁の夢に「沙本の方より暴雨零り来て、急かに吾が面に沾きつ。又錦色の小さき蛇、我が頸に纏繞りつ。如此の夢は、是れ何の表にか有らむ」とあるのは事件の前兆を夢によって解明する祭式的手続きを伴ったものであるが、サホビメの心情告白により「暴雨」「小さき蛇」は「涙」「八塩折の紐小刀」の徴証とされて巫女的要素を揚棄した脱祭祀性を示しており、極めて現実味を帯びた展開になっている。それは単に水霊、蛇神、刀剣という古代信仰上互いに密接不可分なものを呈示しただけではあるまい。「暴雨」「小さき蛇」が雷蛇神としての三輪山の大神主神と関連をもち、ホムチワケの啞の原因が出雲大神を祀らなかつたとされているように、やはり啞であったアジスキタカヒコネ（出雲国風土記・仁多郡三沢郷）と同様に、ホムチワケ自身が穀神・蛇神を具備していたからに他ならない。常陸国風土記・那賀郡・嘯時臥山にみるヌカビコ・ヌカビメの間に生まれた子が「明くれば言とはぬが如く」であり、「小さき蛇」であったとするのもやはり雷蛇神信仰が背景にあった。ホムチワケの啞の原因が夢による託宣で知られるということと、サホビコ謀叛が夢で発覚されるという垂仁のみた二つの夢は決して個々に遊離しているものではないことを示している。尾張国風土記逸文・吾縵郷の段ではホムチワケの啞の原因を夢にみる

のは「皇后」(サホビメと記されていない)となっており、皇后は未だこの世に生存して記・紀の記載と矛盾する。この逸文記事を照合して推考すると、サホビメと名辞されて自害する皇后は物語構成上後次的に纂入された形跡を有し、逸文にみる「皇后」の巫女性が前述の謀叛導入譚ではいちじるしく現実的苦悩を帯びた「哀しき情」となっており、本来サホビメとホムチワケ両譚の間に隔絶があったことを示唆するものであろう。

この見方を助ける傍証として日子坐王系譜の問題がある。日下部氏が始祖とする日子坐王(彦坐王)はワニ・オキナガ両氏の参与によって古事記中とりわけ長大な系譜群を形成している。開化記の日子坐王条では王の皇子女を「并せて十一柱」と記載しているものの実際系譜上に明記されている皇子女の名は十五柱である。この矛盾は吉井巖の詳細な研究によって、沙本之大闡見戸實が生んだサホビコ・ラザホ・サホビメ・ムロビコの四柱が後次的に付加された結果であることで解消された。吉井説からサホビコ・ビメによる垂仁記の物語自身もかなり後次的なものであることが推定されるのである。そしてその物語も遠祖をサホビコとする日下部氏の介入によって定着されたとみて大過ないと思う。

論を日下部氏に戻しつつ今少しこれらについて述べてみよう。

サホビメは丹波道主王の女等四人(書紀では五人)を後宮に喚上げ、うち二女は容姿が醜かったので丹波に帰されマトノヒメは恥じて自害したという話は、本来ホムチワケの養育者として兄比売、弟比売を指名しサホビメが兄の許に戻る話の中にくみこまれていたものと思われる。この一連の話は丹波道主王の女等が采女とし

て後宮に貢上されたことを語るものであろう。采女貢上の規定にある「形容端正」が反映してマトノヒメの自害という悲劇が生み出されるのである。ところで、マトノヒメの話は「バナナ型」説話のコノハナサクヤヒメの話に(但しマトノヒメの話は人類の寿命を語る起源譚になっていない)、またサホビメがホムチワケの後事を託し兄の許に戻る話はトヨタマヒメがウガヤフキアヘズを妹、タマヨリヒメに託して本つ國に帰る話と類似し、サホビメにまつわる話と日向神話との間に説話構成上の関連があることを示している。この関連を日下部氏との対応でみると、ホヲリ海の海宮遊幸譚は鯛の登場、三年間の逗留、帰郷、箱(丹後國風土記・万葉集・古事談などの浦島伝説には玉匣とある)や玉(塩盆珠・塩乾珠)の呪力性などの点で浦島伝説といちじるしい連繋があり、重松明久はホヲリによる海宮遊幸譚を浦島伝説の海宮版として「浦島伝説の影響を多分に受けながら、海神乃至竜神信仰の背景のもとに構成されたもの」と指摘する。浦島伝説は浦島子を日下部首の先祖と伝え、当「和泉国皇別」の日下部首、「山城国皇別」「摂津国皇別」の日下部宿禰はいずれも彦坐王の後裔であってサホビコを遠祖とする日下部連と同族関係にある。また目弱王の父、大日下王の母は日向の諸異君、牛諸の女、髪長比売と記載されており、日向神話と日下部氏はこの点南北州という場に於いて通底していることにもなる。

単人族の伝承を祖述しつつ体系化された日向神話と、浦島伝説を家伝とし系譜上日向に位置づけられた日下部氏との伝承がホムチワケ火中出産以降のサホビメの話とどのように絡み合うのかと

いう問題は大きなテーマであり今述べる余裕はない。しかし右の関連から推して兄比亮、弟比亮、マトノヒメに話を戻してみると、彼女等の父、丹波道主王は書紀によると四道將軍として丹波に派遣された人物（記では道主王の父、日子坐王）であり、後裔氏族は明らかにされていないものの、丹波という地（浦島伝説を家伝にもつ日下部首の地盤は丹波の余社郡）、そして父、日子坐王の存在（日下部氏の始祖）とを考え合わせ、日下部氏がこの伝承に關与していることが想定できるのではないか。道主王の母は息長水依比売でありオキナガ氏の系譜上の参与は認められるが、それはそのまま説話伝承上にまで参与したことを意味するものではないであろう。こう考えてみると、丹波道主王の子女等が後宮に喚上げられた話は日下部氏出身の子氏が采女として貢上されたものであるという可能性をもつことになる。とすれば日下部氏が遠祖と意識するサホビコの妹、サホビメも結果的に同氏によって同様の措置がとられていることになり、ヒメ・ヒコ制の終焉という古層の支配体制の歴史観を道主王の話からリフレクトすることに よって物語化したものと考えられよう。

このように「サホ」にまつわる物語に日下部氏が参与している蓋然性はかなり高く、目弱王の乱にみる事実上の日下部氏衰退とサホビコ・ビメによる歴史伝承のサホ氏衰退の脈絡が日下部氏を通して同一線上のものとなり、更にはその形成基盤と物語の発展を把え得る道が拓けてきたことになる。

次に雄略の固有伝承→目弱王譚→サホビコ導入譚の位相を考える上で、目弱王後日譚を再考してみよう。雄略紀十四年四月の条にあたる記載である。

夏四月の甲午の朔、雄略は吳人を鑒応する為、群臣の進言により根使主（根臣）を共食者に決めた。ところが根使主の身につけていた玉纒があまりに華美であることを聴いた雄略は后と共にその玉纒を見たところ、后はにわかに歎き号泣した。雄略が理由を問うと、その玉纒は兄、大草香皇子（大日下王）のものであり、安康の勅旨により入内する際に禮物として献上する為のものであったと答えた。事の仔細を知った雄略は根使主を斬殺しようとし、根使主は日根に到って稻城を造り抗戦したが敗れた。そこで根使主の子孫を大草香部民、茅渟県主に二分して授け、大草香皇子に殉死した難波吉士日香敷父子三人の子孫を求めて大草香部吉士の姓を賜った。

この記載から考えるべきことは二点ある。一点は根使主が「稻城」を築造して抗戦したということ、もう一点は日下部氏の信頼回復である。「稻城」の用例は先のホムチワケ段と当段を含め、記・紀に四例みられ、うち一例は書紀の同サホビコ段、もう一例は崇峻紀・物部守屋追討段であって四例いずれも戦闘の場にあられる語である。「稻城」はおそらく神事、経済両義を含んでおり、軍事力で「稻城」を破ることは在地豪族の毀滅、食生基盤を奪うことを意味し、古代主権の伸張強化をはかる上で大きな歴史

的意義をもち、また物語展開に寄与するものであると考えるのだが別稿に譲り、今は問わない。ただ両譚に関連して一言しておく、サホ族のヒメ・ヒコ制を背景とした祭祀権、政治支配権の崩壊とホムチワケ火中出産という穀霊児信仰が「稲城」によって整合形成されてゆく過程は、如上の「サホ」にまつわる重層的意義と合わせ考慮に入れておくべきであろう。一方の目弱王後日譚では穀霊児信仰は裁断され、坂本臣の祖、根使主という和泉の一族が衰退してゆく場として描かれているが、「稲城」のもつ本来的意義から「火」による「焼く」行為を通して漸次、皇位継承争いの政治支配権確立の場に転用されてゆく過程の一端を示す好例となり等閑視するわけにはいかない大きな問題である。ここでは謀叛をおこしたサホビコ、根使主がそれぞれ古代文献で僅少な用例の「稲城」に匿まって天皇方に抗戦、敗死してゆく場の共通性を確認するにとどめたい。

次にもう一点の日下部氏信頼回復の問題である。書紀では難波吉士日香蚊父子は大草香皇子に殉死し、この後日譚では日香蚊父子の子孫を求め大草香部吉士と姓を賜ったとするのだが、この大草香部吉士は先の日下部連(首・宿禰)とは始祖を別系にし阿倍氏の祖とする「大彦命」の後裔とされている(撰津國皇別)。踐祚大嘗祭式の午日の祭の条には「奏久米舞。吉志舞」とあり、吉志舞は高句麗の新羅駐兵の故事と新羅の服属儀礼を芸能化したもので、初め膳臣と難波吉志がこれを奏し阿倍氏が統率したとい⁽⁸⁾う。吉士(吉師)は古代朝鮮に於ける首長を意味する語に由来し、対外交渉の任務に深い関わりあいをもつ氏族であり、天武十年に草香

部吉士大形が難波連を賜姓、同十四年には忌寸の姓を賜った。また天武十年三月からの「帝紀及上古諸事」の記定に草香部吉士大形が参加したという事実は、後述する日下部氏関係の伝承を考える上でかなりの意義をもつものと思われ、たえず視野に入れておく必要がある。このように雄略によって追撃され衰退していったであろう日下部氏は、対外交渉で活躍していた難波吉士に承けつがれてゆき、後日譚では日下部氏の信頼を謀叛の首謀者は根使主であったという設定によって回復され、日香蚊父子の殉死を伝えて日下部氏の忠誠心と悲劇性を顕現化しているが、この記載は説話上の潤色と思われる。目弱王譚の本質は有力な皇位継承者としての大日下王を安康(雄略)が打倒したところにあるからである。この日下部氏を称える記載は、日下部氏が允恭系に対し履中系に位していたこと、また「帝紀及上古諸事」記定に参加した草香部吉士大形の存在によって改変造作されたことで証左が得られよう。

ところで目弱王後日譚は更に注目すべき話を載せている。雄略紀十四年、最後の条である。

事件平定後、小根使主は「天皇の城は堅からず。我が父の城は堅し」と周囲に語り、これを聞いた雄略は小根使主を殺したという。小根使主は根使主の子であることが分注によって明らかにされているので「我が父」とは根使主を指す。ところが、根使主の本拠地は和泉国日根郡、小根使主は河内国若江郡であるから両地は地理的にかなり遠隔である。また根使主の後裔は坂本臣、小根使主は河内三野縣主であるので系譜上でも出自を異にしている。

何故突如として登場する小根使主が河内国出身であることがわかるのか。実は小根使主は別な反乱伝承にも絡んでいる人物なのである。清寧即位前紀に載る星川皇子反乱事件がそれである。

雄略亡き後、清寧が皇位を継承することになったが、吉備稚媛が幼子、星川皇子に「天下之位登らむとならば、先づ大蔵の官を取れ」と皇位継承を画策し謀叛をおこしたが結局失敗する。この時三野縣主小根使主は星川皇子に仕えていて斬殺されるところをかるうじて免れた。その贖罪に一役買っていたのが草香部吉士漢彦である。この反乱事件の征圧にあたった巧労働者は大伴室屋大連と東漢掬直であるが、小根使主に関連して草香部吉士漢彦も副功労働者として載録されている点を見逃してはならない。つまり根使主、小根使主は本来父子ではなく目弱王、星川皇子両事件に関連している草香部吉士を通して説話的に縫合された結果そうなったのである。星川皇子事件は吉備上道臣田狹・弟君反乱事件と連繫するものであり、雄略朝に対する一連の吉備氏反乱伝承なのであって、田狹・弟君父子の反乱伝承と目弱王譚との物語構成に関する類似（八十五集で叙述）の一因は草香部吉士の関与にあることがわかる。吉備氏は内外征討に功勞を果し、ヤマトタケル伝承にも深い関わりをもつ氏族で吉備上道臣が五世紀後半の雄略朝に反乱事件で勢力を失って後は、吉備下道臣・笠臣が台頭してきてこれら一連の吉備氏伝承は吉備上道臣の家記を基にまとめられたと言われている⁽¹⁾。その点対外交渉で活躍した草香部吉士が日下部氏の伝承を記・紀説話展開の中で果たした役割と同一である。雄略紀八年二月条には、高句麗の軍事進入の爲、膳臣斑鳩・吉備臣小

梨・難波吉士赤目子が派遣されて新羅を救ったとあるように、吉備氏と草香部吉士氏は対外交渉の機縁から説話上での接触がみられるようになったのかも知れない。

ところで根使主と小根使主はいずれも名に「根」を有す人物で、これは根使主の本拠である「日根郡」に由来すると言われている。しかし記・紀に於いて「根」を伴う人名の例はそのほとんどが謀叛には無縁でむしろ諡辞をあらわす人物として登場する。その点根使主、小根使主は例外にあたるのだが、記・紀ではいまいひとり謀叛をする人物「齒田根命」がいる。雄略紀十三年春三月、齒田根命は采女、山邊小嶋子を奸し「馬八匹」、「大刀八口」の資財を以て贖罪されたと伝えられている。齒田根命はサホビコの玄孫と記されていて記・紀中、サホビコの名があらわれるのは垂仁記・紀サホビコ段と雄略紀にみる当段のみである。他所に見えない齒田根命をわざわざサホビコの玄孫と系譜上の関係を明記し、雄略朝のこととして記載したのは根使主、小根使主という名の関連から雄略朝・日下部（吉士）・サホビコ譚の密接性を語るものなのかもしれない。

雄略紀十四年四月の記載から判明するのは右の如くである。

日下部氏は雄略朝の武力征圧によって屈服したが記・紀物語が述べんとするところは、履中側の観点から同氏を反逆の徒とせず、にむしろ同情的立場でこれを把え信頼を回復させた。一方、目弱王譚は皇位継承に絡む王権の本質問題である為に雄略を否定的に記載することを避けねばならない。そこで「媒」に立った根使主を謀叛の首謀者にすることによって矛盾を回避した。「媒」は采

女貢上に典型視されたとおり、在地豪族を大王家が掌握する際に派遣された人物と思われ、記・紀の反乱譚に類見する「媒」謀叛の類型を援用した所産であろう。根使主の物語集入には日下部氏の家伝を基に草香部吉士が関係しており、対外交渉で接触のあった吉備氏の星川皇子事件を含む吉備一族の反乱伝承と物語構成の上で相互不可分の関係にあった。こうして目的王譚は雄略の固有伝承を反映させつつ、後日譚よりその構成面に於いて田狹・弟君を中心とする吉備氏反乱伝承と相似関係にあることが判明する。そして垂仁記という時代を意識しながらも雄略の好色にまつわる伝承を更に洗練させ、文芸的に昇華させた物語が日下部氏の遠祖とするサホビコ譚の導入場面であると言えよう。

四

サホビコ譚のサホビメ、目弱王譚の長田大郎女（若日下王を含む）、吉備氏反乱伝承の稚媛は、いずれもサホ氏、日下部氏、吉備氏といった大豪族が天皇家に権力を掌握、支配されてゆく過程を物語化したものである。この物語化への背景には当然「采女」の問題がはらんでいるであろう。

采女については諸豪族の服属の証しとして貢上された単なる人質説と捉えるより、在地の祭祀権をも掌握する巫女的要素を認める説の方が妥当である。^①政教未分化体制の古代にあって在地豪族の政治権ならびに宗教権をも傘下に吸収することで天皇家は中央集権国家体制の基盤を確立することができたというわけだ。

凡そ采女は、郡の少領より以上の姉妹、及び子女の形容端正

しき者を貢れ。（大化改新の詔）

其れ采女貢せむことは、郡の少領以上の姉妹及び女の形容端正なる者をもちてせよ。（後宮職員令）

とある兩条の主なる規定は一致している。改新の詔文は津田左右吉を嚆矢として近江令乃至は大宝令の条文を転載、造作したものとするのが通説になっているが、^②ともかくも采女は兩条によって制度化される遙か以前に古代王権の形成過程の中に深く関与しつつ存在していたことはまちがいない事実である。

記・紀に於いて采女の記事が頻出するのは雄略朝のことであり、この現象は采女制の起源の上限を雄略朝と想定し得ることを示している。長田大郎女、稚媛もその一連のものである。そしておそらくは雄略を軸として展開する愛を絡めた反乱譚も兩条が記載する「形容端正」と無関係ではあるまい。つまり、采女貢上という形で天皇家に対し諸豪族の服属を果す政治・宗教権支配史の舞台裏では、同時に「愛」というプライベートな息吹きが萌芽していることを意味すると思われる。記・紀に散見する「采女姁し」の記載は、采女が「形容端正」であったが為に起生し得るのであって、天皇といえども事情は同一の筈である。ただ天皇に罪過がないだけのことで頻繁な采女貢上の内幕には政治史から離れた天皇一個人の愛にまつわるエピソードが伝えられるのは当然の成りゆきであろう。記・紀・靈異記にみる雄略の好色伝承の一因は如上の事情に由来する。

皇位継承をスムーズにする為に雄略の固有伝承を安康に負荷させた目弱王譚、稚媛を後宮に喚上げたことに起因する田狹・弟君

の吉備氏反乱伝承は、日下部(吉士)氏、吉備氏の参与を経ながら政治史から流露する雄略のプライベートルームの本質を背景として成立したのであり、更に積極的な日下部(吉士)氏の介入と安万侶の朱筆によって文芸仕立てにされたのがサホビコ譚導入部にみる垂仁・サホビメの愛の場面であらう。垂仁がサホビメの「御膝に枕きて」午睡していたという描写は、目弱王譚と同様、本来は「神牀」であったとする神田秀夫の指摘は鋭く、両譚の類似は単なる類似にとどまらず雄略伝承を核として抱えられた記・紀物語の発展性を示したものであった。サホビコ譚が謀叛譚にのみおわらずに滅びゆく者への讃美として語られている一因は、記・紀成立期に於ける日下部(吉士)氏の立場に關係している。

稲荷山古墳出土の鉄剣銘文以来、政治史側から雄略時代の再検討が近時活発化しているが、ことは王権発達史の表舞台だけではなくして古代文学形成史側からみても雄略はエポックをなす人物であったと言えよう。

注(1) 近親相姦説については浜田清次(『古事記の叙事文芸的構造』『日本文学研究』四号)がいちちやくこれをととなえ、中西進(『記紀の人々』『解釈と鑑賞』三十三巻七号)によって部分的に支持されながら今日に到る。兄妹によるヒメ・ヒコ制を積極的且つ詳細に論じたのが倉塚暉子(『兄と妹の物語』『文学』三十九巻一号、後に『巫女の文化』に所収)である。

(2) 神田秀夫「垂仁天皇と沙本毘売との物語」(『古事記の構造』所収)。

(3) 関山和夫『説教の歴史——仏教と語芸——』

(4) 吉井巖「ホムツワケ——崇神王朝の後継者像——」(『天皇の系譜と神話』二)所収。

(5) 「古事記皇族系譜の検討」(『天皇の系譜と神話』一)所収。

(6) 「浦島子伝」の解説。

(7) 志田諱一(『古代氏族の性格と伝承』増補版)も新嘗饗礼の観点から丹波道主王と日下部氏の密接性を示唆している。

(8) 志田説(前掲書注(7))。志田は吉士が阿倍氏の同族系譜にくみこまれたのは軍事・屯倉などの關係ではなく、この新嘗・服属饗礼を通じてであったとする。難波吉士と阿倍氏との結びつきについての説は、他に大塚徳郎「阿倍氏について」(『続日本紀研究』第三巻十・十一号)、林尾辰三郎「中世芸能史の研究」などがある。

(9) 佐伯有清「新撰姓氏録の研究 考証篇第二」。なお姓氏録「右京諸蕃」の条に「難波連、出自高麗国好太王也」とある。

(10) 志田、前掲書注(7)。

(11) 人質説の代表的なものは門脇楨二(『采女』)、土橋寛(『古代歌謡論』)などであり、巫女説には折口信夫(『宮廷饗礼の民俗学的考察』全集十六巻)を嚆矢として岡田精司(『古代王権の祭祀と神話』、倉塚暉子(前掲書注(1))、菊池威雄(『吉備津采女挽歌』、早大出版部「柿本人麻呂」所収)などが同一の立場をとる。

(12) 門脇(前掲書注(11))は、改新の詔文は養老令が整ってからその条文を基にして創作されたとする。

(13) 前掲書注(2)。